平成八年七月一日発行（毎月一日一回発行）

經濟論叢

第158巻　第1号

哀　辞

故浅沼萬里教授遺影

基軸通貨国ビナイン・ネグレクト論の系譜……本山美彦　1

近世農村舞台の生成と発展……後藤和子　16

中国華南地域における
金融機関の勃興とその性格……姚国利　34

ベンチャー企業の研究開発支出の決定要因……蘇顯揚　54

芸術支援政策の財政問題（2）……金武創　77

記　事

浅沼教授逝く

追悼講演（赤岡　功・青木昌彦・瀬地山敏）

追悼談（熊沢　誠・菊谷達弥・三田栄治）

故浅沼萬里教授略歴・著作目録

平成8年7月

京都大學經濟學會

追悼講演

故 浅沼教授の略歴と業績

赤岡　功

3月23日の夜，浅沼さん急逝の報を受け私は全く驚きました。なぜなら，そのわずか数時間前，私は，ご入院なさっておられた京都大学病院で浅沼さんにお目にかかっていたからです。

23日の午後2時ごろ病室に伺いますと，浅沼さんは車椅子に腰をかけておられました。待ちかねておられたように，いろいろの資料を私に直接手渡しながら仕事の説明をして下さいました。そのご説明はいつもの浅沼さんと同じで，伝えるべきことの要点について一切の省略はなく丁寧なものでした。したがいまして，要点のみとはいえ時間が長くなりましたので，お疲れになるのではないかと心配したほどでした。結局1時間ばかりお話を伺うことになりましたが，病室を辞去いたしますときには，あれだけのお元気さがあるのだからとむしろ安心した次第でした。それが，その夜に悲報がもたらされたのです。驚愕するとともに大きな喪失感におそわれました。

顧みますと，私が浅沼さんに初めておめにかかりましたのは，1965年の4月，田杉競先生の研究室においてでした。その時，浅沼さんは博士課程の第2年次に在籍しておられ，私は修士課程に入学したばかりでした。31年前のことになります。以来，浅沼さんは私にとって同じ田杉門下の先輩であるとともに先生でもありました。ただ，初対面のときに，ともに青衿でありましたために，親しく浅沼さんとお呼びしてきましたが，いつも暖かくご指導下さったという点でやはり先生でもありました。浅沼さんは，この1965年の7月には，経済学部の助手になられ，私はその2年後の11月に助手となり，ずっと，同じ経済学部経営学科のスタッフとして研究・教育にあたってまいりました。

したがいまして，浅沼さんとは，同じ田杉門下であり，経営学科の所属ということで，今日，私が，浅沼さんのご略歴とご業績についてご紹介することになりました。

まず，略歴からご紹介させていただきますと，浅沼萬里先生は，そのお名前が萬里の長城にちなむことからわかりますように，ずっと中国でお育ちになりました。お手元の略歴では（本誌132ページ），お生まれが京都となっていますが，それはご出産のためにご母堂様が一時帰国なさったからでした。日本の敗戦は小学校4年生のときに旧，奉天

でお迎えになりました。雪崩をうって侵入してきたソ連軍戦車の威圧感について，かつてお聞きしたことがありますが，敗戦下の外地で体制が崩壊し混乱を極め，小学校も開かれず，大変ご苦労なさったようです。とくに，ご尊父様は，出征しておられましたから，まだ幼い浅沼さんが長男として御母君を助けて一家を率いるご親父の役割を見事に果たされ，翌年8月無事に桑梓京都に引き上げてこられました。

しかし，そうした混乱のなかにあっても，浅沼さんは，ソ連兵が大変乱暴でもあるのに，行軍の時には美しい5重唱を歌っていたことに強い印象を受けられたそうで，このことを奥様にお話になっておられます。小学生のこの頃から物事をみる場合に，それが敵軍であっても，一面だけにとらわれずその優れた点も逃さず，多様な側面を過不足なくみる習慣ができあがっておられたようです。

京都では，同志社中学・同志社高校にすすまれましたが，同志社ではお母様の恩師のアリス・E・クイン先生とその友人のシアトルのシャープ牧師の教会の方々の善意による奨学金をお受けになり，生徒会長，テニス部のキャプテンをなさっておられました。高校の3年になって恒例によりテニス部をお止めになると，ご病気になってしまわれました。病院で1年1カ月，その後ご自宅で約2年療養され，1956年9月同志社高校の3年に復学されました。闘病生活の間中ずっと，医師から勉強を禁止されるという状況でしたが，半年後に京都大学経済学部の入試に合格され，1957年4月入学なさいました。ですから，1961年に経済学部を卒業し，大学院に進まれてから経済学部の助手になられるころまでは，経営学の田杉先生の門下として，バーナードやサイモンの組織理論とともに，菱山泉先生や山田浩之先生のご指導を受けながら近代理論経済学を学び，研究してこられました。経済学部の助教授に就任されてのちハーバード大学エンチン研究所で2年間の客員研究員として研究をなさってご帰国になられてからは，内部組織の経済学，組織間関係の経済分析の展開をなさっておられました。1984年，教授となられ，京都大学評議員をお務めになられ，1993年4月から2年間にわたり，経済学部長・大学院経済研究科長をお務めになられました。ちょうど大学院重点化をすすめる時期にあたり，大変ご多忙な毎日でした。昨年3月に学部長の任期が終わり，ようやく研究生活に復帰になられたその5月に検診をお受けになり胃癌と診断されました。昨年7月に手術をおうけになりましたあと，秋にはご退院になられ，ご疲労をおして強い責任感からお仕事をなさり，博士論文の審査などもなさっておられました。しかし，ご病気は再発し今年3月再入院され，お亡くなりになった23日も直前までお元気になさっておられたのですが，

容態が急変し，春秋60で，他界されました。

私は，悲報に驚き，本当に申し訳ないと思いますとともに，無念でした。

申し訳ないと思いますのは，私は，大学院重点化にむけた努力が，単に多忙にであったというだけでなく，強いストレスになっていたことが大きな原因の１つだと思われてならないからです。１昨年の夏，予算申請にご苦心をなさっておられたときに，偶然，河原町四条でお目に掛かりましたときは，雲の中を歩くように力なく，大学の中ではかってみたことのないようなお疲れのご様子がうかがえました。思わず「とにかくご健康にお気をつけ下さい」と申し上げたほどでした。学部のためのご尽瘁こそが浅沼さんのご健康を損なったと思われてなりません。

残念でありますのは，なぜ，せめてあと数年の命が浅沼さんに与えられなかったのかと思うからです。

浅沼さんは，そのお話しぶりと同じように，研究におかれても，大きな見通しに立った上で，どのような小さな点もおろそかにしたり省略はせずに必要な準備を着実に積み上げていかれます。したがいまして時間がかかります。とくに徹底した実証研究を踏まえておられましたから，とりわけ時間はかかりますが，そのご本人からみても，ご研究がもうほとんど完成したとお思いになられ，１巻の書物として上梓間近というそのときに，病に倒れられたのです。

これまでにも，ご研究は国際的にも注目され，世界の一流の研究者の多くが浅沼さんの業績を引用していますし，現実の経済に関しても，日本の取引慣行に関する研究成果をもって，公正取引委員会，通商産業研究所，総合研究開発機構，日・ＥＣ産業協力センター等で学識を提供され，日本の経済のために大きな寄与をなさっておられましたから，世界の学界もそのご研究を鶴首しておりましたし，この著作によってますます大きな貢献をなさるはずでありました。そして，上梓のあとは，さらに拡張して，日本の企業の綿密な実証研究にたった日本発の企業理論としてご研究を完成させるご計画であったと思います。その書物の完成の直前で，次の段階のプランがおおよそ出来上がっている時に病がその意図を妨げたのであります。浅沼さんにせめてあと数年の歳月がなぜかされないのか，斯の人にして斯の疾あることの無念さを痛感しています。

さて，浅沼さんの業績について見ますと，企業内部における設備投資決定，日本企業における受注と生産の調整の仕組み，情報のネットワークの企業組織への影響等々につきましても，重要な研究を発表しておられます。しかし，最も大きな貢献は，第１に経

済主体間の長期継続取引に関する徹底した実証研究と，第2にそれに基づく理論の枠組みの拡張・発展への寄与，そして，第3に，こうした研究成果から現実の産業組織の改善への示唆を与えられたことだといえます。

浅沼さんのお仕事について申し上げます場合，メーカーとサプライヤー間の，部品や原材料の長期継続取引の実証研究がまずあげられます。実際論文の多くがこれに関するものであり，また，注意されてよいことですが，浅沼さんは日米通商摩擦が深刻になる以前から日本の自動車産業の長期継続取引の実証研究をなさっておられ，その厳密な調査は国際的にも高く評価されていますから，日本の長期継続取引について論ずる人は，必ずといいほど浅沼さんの調査を引用しています。また，外国文献にも浅沼さんの論文はよく引用されています。したがってこれが大きな業績として輝かしい光芒を放っています。

浅沼さんの実証研究のすばらしい点は，経営学を専門とする者からみますと，長期継続取引が経済的に合理的な場合があるということを明らかにしているだけでなく，長期継続取引の中で買い手と売り手がフィード・バックを重ね，その中でそれぞれの企業も成果をあげていき，かつ，これらの企業のシステム全体としても成果を改善していくノウハウを積み上げてきていることを明らかにしていることでありますし，しかも，それを，従来よくみられるように，日本的特殊性として説明するのでなく，欧米で発展してきた経済理論にたった最近の新しい理論枠組みで説明しておられ，そのため，これまで欧米から理解されにくかった日本の産業組織の経済合理性が欧米から理解されるようになったことにあります。そして，こうした，お仕事によって日本企業の国際理論がすすみ，日本企業の経営の移転が可能になったと考えられます。実際，アメリカの自動車産業が，日本の自動車産業のように，開発の初期の段階からサプライヤーに設計参加させるようになるについて浅沼さんの業績の与えた影響は大きいといえます。

そのほかにも浅沼さんが実証研究をなさり国際的にもよく知られている論文は多数ありますが，時間も限られておりますので，ここではこれだけにしまして，浅沼さんから病院でお聞きしましたことについて少しお話したいと思います。著作目録の最後のページに「職場の労働組織と会社の人的資源管理」というワーキングペーパーがあげられています。ここにはページ数がでておりませんけれどもこれは200字詰め原稿用紙に換算しますと約800枚近い大部のものでやはり厳密な実証研究に基づくものであり，内容は労働者が長期継続雇用の下で企業内部で技能を高めそれが企業経営を強くするというこ

とが明らかにされています。これは，労働力の活用の面における長期継続取引のご研究ということになります。

ところで，最初に私は浅沼さんが逝去された23日たまたま病院にお見舞いに参ったともうしましたが，その時のお話は販売面での長期継続取引の議論がその大半でありました。したがいまして，浅沼さんは，企業活動の主要な3つの領域，すなわち，第1に原材料・部品の調達，第2に労働者の雇用，第3に製品の販売・流通，この3つの領域の全体にわたり，同じひとつの観点，長期継続取引という観点にたって，徹底した実証研究を行って，従来一般的であったように，短期のそのときどきの市場条件のもとで最も有利な取引を行うという見方から，長期継続取引を重要な選択肢として含む新しい企業の一般的理論の展開を考えておられたということができます。

そして，これは理論的貢献にとどまらず，長期継続取引により当事者たちが経営成果を改善していくノウハウの蓄積において一日の長がある日本企業の実証研究をこれらの3つの領域で，厳密に行っていき，その結果を世界に向かって明らかにすれば，世界の企業が日本型産業組織を参考にすることになる，日本型産業組織が世界の産業組織を変える日がくると考えておられたのであります。著作目録（135ページ）の論文は「日本企業が世界に寄与しうるもの――北米での自動車生産にみる――」と題されており，また，その3つ後の論文のタイトルが「日本型産業組織が世界の生産システムをつくりかえる日」となっています。これらの前後の論文のタイトルをみるだけでも，浅沼さんの研究にこめられた理論だけではなく実践にたいする熱い思いが伝わってくるように思います。

幼いときすでに満州でソビエト軍の乱暴さとともに基盤としての文化の高さをも発見するという，表面的な現象にとらわれず多面的で冷静に価値ある判断をする態度を身につけておられた浅沼さんは，日本の経済も企業もまだ弱小のころに，対日戦勝国であるアメリカのキリスト教会の方々の好意の奨学金をうけて高校に学び，そのことを生涯大変感謝しておられましたが，いつの日か日本がアメリカにそして世界に貢献する時がくることを心の奥で夢見ておられたに違いありません。そして，ここであげました論文からは，その夢が現実のものとなりうるという心の高揚ぶりがよくわかる気がいたします。

ご研究は，さきほど申し上げました企業の主要な3つの活動領域のうち2つまではすでにまとまっており，これで一つの区切りをつけて完成させ，第3の販売流通の面につきましては現在のところ浅沼グループの他の研究者の研究にまかしておられましたが，

これにつきましても浅沼さんご自身の計画をおもちでそれを含め日本の企業の実証研究に確固たる基盤をおいて日本発の企業の一般理論を大きくまとめようとなさっておられたのであり，私はその一端を伺ったように思っています。

浅沼さんはこれまで論文という形で公表された研究成果によっても国の内外から高く評価され影響力をお持ちでしたが，これらをまとめ上げてその成果をもってさらに広く強い影響力のある発言をなさることになるという，ちょうどその時に浅沼さんは突然，白玉楼中の人となられたのです。なぜ，あと数年，それが無理ならせめてあと1年の時が浅沼さんに与えられなかったのかと思いますと痛恨のいたりです。

しかし，浅沼さんは，すでに数多くのすぐれた研究者を養成しておられ，また浅沼さんの研究に影響をうけ追随している研究者は国際的にも少なくありません。したがいまして浅沼さんがなさろうとしたご研究は確実に継承されていくことになると思います。浅沼さんご自身，実はこのことはよくご存じで，この点はあの方が，あの面はこの方が研究を進めておられるとお亡くなりになる数時間前に語っておられました。それが，今となっては私達のなぐさめといえます。

浅沼さん，本当に大変でしたね。お若いときにも大病に襲われ，この度また現在の科学では克服不能の病に冒されたのですね。

しかし，浅沼さんは本当に立派でした。すでに大きな仕事をなさっておられますのに，それをさらに発展させる情熱を内にたぎらせてそのプランを病室で語り続け，御自身ではお話をとどめるところがありませんでした。

今，永訣の時がいたり，30余年の星霜において，浅沼さんと共有した数々の場を思い起こし，喪失感に耐え難い思いがします。

しかし，浅沼さんは，浅沼さんを苦しませた病にもはや妨げられることはないのだと思い直しています。

浅沼さん，どうか白玉楼で存分に文章をお書きください。

故 浅沼教授の学問をふりかえって

スタンフォード大学　青 木 昌 彦

故浅沼萬里教授の学部葬にあたりまして，経済学部から故浅沼萬里教授の業績を述べ

る機会を与えられましたことは，私個人にとって大変光栄であると同時に，大変深い悲しみに囚わる出来事でございます。私事になりますけれども私が京都大学に就任いたしましたのは1969年のことでございましたが，浅沼萬里教授はちょうどその一年前に京都大学経済学部助教授に昇任されました。1960年の安保闘争という時代に，東と西とに分かれていましたけれどそうした経験を共にしたということもあって，それ以来私と浅沼さんとは同志というような信頼感に結ばれながら研究を共にさしていただきました。特に1970年代後半に京都大学経済研究所におきまして，比較経済体制論というワークショップを共に持ったことが，その後のそれぞれの研究の出発点をかたちづくったという点で感慨深いものがございます。私は1984年にスタンフォード大学に転職し，私共は太平洋を隔てることになりましたが，その時はちょうど浅沼さんが学問研究という点でも，また研究成果のインパクトという点でも，国際的な活動の場をまさに広げられている時期でもありました。したがって太平洋を隔てながらも浅沼教授とは共同研究を続けられるという幸運に恵まれました。

私は，1984年以来スタフォード大学経済学部におきまして日本経済論を毎年講義してまいりましたが，その中で浅沼教授の研究業績は日本経済を理解する上で小池和男教授の業績と共に，欠かすことのできない二本の柱として常に学生に購読を課してきました。今年も実は，浅沼教授が亡くなる一週間前の試験におきまして浅沼教授のこの著作目録の最後にあります「流通と生産のコーディネーション」について，特にシリコンバレーに現在見られますコンピューター産業において発展している生産のマス・カスタマイゼーションとの比較でどういうふうに評価するかという問いを学生に課したのです。そういうふうに私は，毎年毎年講義の準備の中で浅沼教授の論文をレビュウする機会がありましたけれど，その年毎に浅沼教授の深い洞察をあらたに発見するのがつねでありました。

私は未だ理解が足りないと思うのですが，浅沼教授の全貌を私なりに解釈いたしまして，ここに皆様とともに共有していただくことによって浅沼教授にたいするこれまでの学恩の幾分かをお返ししたいと思います。浅沼教授の業績はこれまで多数の方が申されたように1980年の後半から90年中半にかけまして続々と発表され，内外の学会に大きなインパクトを与えた自動車産業における下請け関係の構造の研究に代表されているということはよく知られていることでございます。それは，景気循環のために親企業が下請企業をバファとして用いているという内外において長い間培われてきた通念を打ち壊す

ものでありました。そして親請企業というより中核企業という概念を発展させられ，この中核企業が供給企業との間に長い継続的取引関係を結びながらその中で経済循環のリスクを押し付けるというのではなくて，ある時は経済循環のリスクを吸収しながら下請企業のフレキシブルな生産能力，適応能力を高めていくという親企業と供給企業との補完関係の構造を明らかにされました。

そして前述の通念を壊すことにおいて浅沼教授はこの分野でそれまで誰も為し得なかった研究方法を開発されたのであります。それは第一に，明快な理論的概念装置を準備され，そして実地の聞き取り調査に基づいた新しい事実のファインディングをこの概念装置に従いながら整理して，しかもその概念装置をさらに豊かなものにするという理論的概念装置と事実発見のあいだのインタラクティブな研究方法を発展させられたということです。

こうした1980年代の業績はよく知られたものでありますが，私は1970年代の浅沼教授の研究生活を振り返ってみますと，その時期は概念装置の準備をされていた重要な時期であったという気がいたします。1970年代の末期にウィリアムソンの名著「市場と企業組織」を翻訳されました。この翻訳が機縁ともなって先ほどの弔電にもありましたようにウィリアムソン教授との終生かわらない友情を結ばれました。しかしながらそれと同時に，ウィリアムソン教授の「企業の特殊な技能」という概念の企業組織論への含みについて，またその限界についても自覚を深められていかれたと思われます。それから独自に「工場の哲学」に代表される義兄でもあられる中岡哲郎教授の御仕事，また1980年代のはじめに京都大学経済研究所にこられました小池教授の工場職場の実地調査に基づく技術熟練の性質についての御仕事から，研究方法の面でも大きな刺激を受けられていたと推察いたします。

私は昨日，京都の自宅に帰りまして久しぶりに書棚から1977年に出版されました「経済体制論」という，私の編集した本を取り出してその中に収められました浅沼教授の「企業組織の経済分析」という論文を新ためて読んでみました。この論文の中で浅沼教授はサイモン或いはコース，ウィリアムソン或いはフランク・ナイトという企業組織の理論を展望しながら，「限界づけられた合理性」という枠組のなかでの労働者の技能の意味，その企業組織の含みについて議論されています。ここで提出されていた問題意識や概念は最近経済学における進化論的な考え方の関心の高まりのなかで，ふたたび意識化されてきている問題をかなり先取りした形で提出されているように思います。未だ

以って新鮮な生命力のある論文だと思われます。そうした準備期間を経て先ほど申しました1980年代の研究が花咲くわけです。1980年代末にはカリフォルニア大学のウィリアムソン或いはスタンフォード大学のジョン・ロバーツ，ポール・ミルグロム或いはカリフォルニア大学サンディエゴのジョン・マクミランといった取引論或いは契約理論において世界的なフロントランナーとなった人たちが浅沼教授の業績に注目し，彼らの理論的モデルの実証的根拠として引用するようになるわけです。

浅沼教授の仕事をもう一度位置づけるためにここに1990年アメリカ経済学会の機関誌である「American Economic Review」に掲載されましたミルグロム＝ロバーツの著名な論文「Economics of Modern Manufacturing Technology and Organization」についてふれてみたいと思います。この論文においてこの二人の著者は，現代の製造業はかつての単一の商品の大量生産の効率利用からむしろ多様な製品を生産販売するフレキシブルな能力の競争に移ってきたということを指摘しております。そうした変化が製品の開発，製造，マーケティングにおける戦略の補完性を益々強めつつある，そうした意味で活動のコーディネーションの重要性というのが益々高まってきているということを指摘しています。そしてオリバー・ウィリアムソンが強調したような取引に特有な機械の存在が企業の統合度を高めるという議論に対しまして，汎用性の高い機械というものが利用可能になるのに従いむしろ統合度の低い企業の分散化現象が生じてくるということも指摘しています。この議論を展開するなかでミルグロム，ロバーツは浅沼さんの仕事を引用しているわけであります。

1990年代の浅沼さんの業績は，特に中核企業とその企業の上流にある供給企業との間の補完関係を捉えその役割を明らかにするということであったわけですが，先程赤岡先生のご紹介にありましたように，浅沼教授はさらに中核企業と下流の側にあるディラーとのコーディネーションの関係，および企業の内部そのものにある組織戦略といいますか人事管理の問題にも目を向けられ始めました。1991年，ストックホルム商科大学で開かれました国際会議において浅沼教授は，企業と下流のマーケティングとのコーディネーションの問題についてこれまた画期的なペーパーを発表されました。これは文献目録の一番最後に出ている論文で有ります。この論文が，先ほど私が申しましたスタンフォード大学の後期試験の問題に材料として使わさしていただいたものでもあります。

また，組織戦略問題に関しましては職場の労働組織と会社の人的管理組織という研究がございます。このなかで浅沼教授はミルグロム，ロバーツが指摘いたしましたような

多様な製品の生産販売をフレキシブルに行うという能力に関しては中核企業と上流下流の企業のコーディネーションが必要だというところに留まらず，企業の内部で多面的な能力を労働者の育成ということが同時にまた補完的な役割を果たしているということに注目されたわけです。そこで行われたことは，小池教授の発展させられた労働者の幅広い技能を育成するための職能的割当てという概念と，ドアー教授が展開されていた日本の企業の内部における従業員のランクがインセンティブの装置として機能しているという，日本の企業の二つの人事管理の側面を統合した概念装置を構築しておられます。こうして浅沼教授は中核企業の上流下流の関係および内部の組織戦略のあいだにある補完性の構造というものを，包括的に取り扱われることに成功されました。そして1970年代の仕事の一部である投資決定のプロセスに関する研究を加えて日本の製造企業の全体像をひとつの「システム」として捉え，それを一つの本に纏められるというのが構想であったと思います。

それでは浅沼教授の日本経済の現在・将来にたいする貢献の意味というのはどういうところにあるのでしょうか。浅沼教授の未発表の論文となりました職場の労働組織と人的管理資源の第一部の結びのところを若干引用させていただきたいと思います。浅沼教授はこの様に言っておられます「1990年から1993年にかけて日本ではいわゆるバブルの崩壊波及効果が種々の業種で点在し，多くの企業が減益や赤字という事態に直面している。これとともに一般向けのメディア上で日本の経済の限界にきたとか終身雇用の現行システムはもはや維持できないとかいう種類のメッセージを主要内容とする論説が盛んに繰り返されるようになった。だがいくらそうした紋切り型のメッセージを繰り返しても日本企業のこれからの経営にとって有効な指針は出てこないであろう。

むしろ次のような諸問題を考えるべきだ。一，そもそもそういう論説の筆者たちは日本型経営という言葉がなにを意味し，終身雇用と年功システムという言葉がなにを意味しようとしているのか。二，日本の企業が作り出したシステムのなかに日本以外の国にとっても，また日本企業自身にとってもこれらの経営を展開する上でこれまでにもまして重要視されて然るべき要素，言い換えれば世界各国の企業のこれからの経営にとって普遍的な価値を持ちうる要素は全くなかったのか。三，もしその要素があったとすればそれは何と何であったのか。四，それらの経営，終身雇用年功序列等というキーワードは的確に捉えられているといえるのか。五，もし日本の企業が国内で従来運営してきたシステムを変革するべきであるとすれば何をどの方向に向けて変えるべきであるのか。

私には上記の二や五の問題について考える上で日本型経営，終身雇用，年功序列といったキーワードが有効な役割を発揮するとは思われない。この本は上記の三について考察することを主たる内容としているが，この本を最初から最後まで読んでいただければ明瞭になるように四の問いに対する私自身の答えはＮＯである。二や五の問題について考えるためには定型化されたキーワードの底にあるもの，そしてそれらのキーワードによっては認識の網の目から零れ落ちるものをとらえることが肝心である。」このように浅沼教授は言っておられます。

1970年代の後半に自動車産業を中心としたアメリカの製造業は当時日本の産業の挑戦を受けて従来の，先ほどミルグロム，ロバーツが指摘していたような，単一の商品の大量生産のためにつくられた組織戦略或いは製造戦略の見直しを迫られておりました。その過程で日本企業の組織製造の戦略は真剣な学習の対象となりました。そして，アメリカはそうした学習の成果を一方ではデジタル通信の革命という技術革新と結び付けてよりフレキシブルな小回りのきく組織形態を作りつつあります。例えば，私が今仕事の本拠としておりますシリコンバレーでは企業の組織のあり方というものはいろいろな面において浅沼教授が抽象されたところの中核企業とディーラー或いはサプライヤーとの関係とオーバーラップするところがあります。日本の自動車産業，シリコンバレーのコンピューター産業というような，技術的にも歴史的にも全く異なった産業の間にある，ある種の無視し得ない同一性があることはミルグロム，ロバーツも認めているところであり，またそれは浅沼教授の業績の普遍的な性格を示唆しているところであると思われます。

浅沼教授が強調されようとしたのはフレキシブルな生産販売の実現可能性のためには単に中核企業と上流下流の水平的なコーディネーションの必要性にとどまらず，アメリカと日本の製造業の将来の姿がどのようになるとしても，企業の人的管理資源のあり方が依然として重要な役割をもつという考えであります。1970年代から生産過程における人間的要素の役割，労働者の技能の問題，そうした一貫したテーマがうかがわれるのであります。

浅沼教授のお仕事というものは，もし90年代の初めに著書として出版されていたとしても戦後経済学を国際的に代表する著作としての地位を獲得したことは疑いないことだと私は考えます。私は浅沼教授にお会いする度に，著作の完成を急がれるようお願いするのが常でありました。私はこの著作の完成が遅れたのは，学部長をはじめとする激職

の所以のみと推察しておりました。しかし1993年の3月に，この先ほど申しました職場の労働組織と人的管理の論文の草稿を送っていただいたときに御仕事の広がりが更に雄大であることに驚かされました。それにしても生前の発表に決意されなかったのはなぜだろうかということを考えます。さらにもっと雄大な構想をお持ちだったのかもしれないと私は考えました。

これは私の推察に過ぎないのですが，この数年間浅沼教授との会話のなかで印象に残っているのは，この京都大学経済学部において下請工業論の先駆的業績をあげられました田杉教授の業績について度々尊敬を込められて触れられていたことであります。それは日本の下請制度の歴史的進化に浅沼教授は関心を持ちはじめていたからではないかというふうに推察いたします。浅沼教授はおそらく日本企業の来し方行く先に多くの思いを巡らしておられたと思います。その考えを体系的なかたちで，もはやうかがいえないのは大変残念であります。しかしこの著作の第一部の最後のほうでこのようにも述べられています。「1979，80年がアメリカの製造業にとって再構築の長い歩みのための出発点であったように，1990年から現在にかけての期間は日本の製造業の新たな脱皮のための出発点の意味をもっていることがやがて明らかにされるであろう」。こうした冷徹な楽観論が可能になるのは浅沼教授が自らのフィールドワークによって得られた洞察とそれを解釈するための理論装置に深い確信をもっておられたからにちがいありません。それにしても御著作の発表を生前完成されることなく逝かれたことは多分に無念の思いも残されたに違いありません。しかし，浅沼教授の仕事の意義はしっかりと国際的な経済学のなかに組み込まれ共有されています。また，浅沼教授のプログラムはやがて若い世代の学者に引き継がれていくことになると思います。また，革新的理論概念装置を事実調査によって得られる情報に基づいて発展させながら経済社会についての新しい知見を得ていくというこの学風は，余人のなかなかに追随しえない境地を開拓されたものとして我々経済学者の深い敬意の的となっております。

浅沼さん日本経済に関して，また世界経済に関して我々の理解を深めるためにいろいろ教えて下さり大変ありがとうございました。

故 浅沼教授の人柄を偲ぶ

京都大学経済学部　瀬 地 山　敏

御紹介いただきました瀬地山です。先ほど来浅沼さんの経歴及び業績についてお話しがありました。逝去なさった後しばらくは，同僚の前であれ，わたくしの妻の前であれ，あまりにも理不尽なできごとゆえ，悔し涙を禁じることができませんでした。気持ちが少し落ちついたいま，今日のお話しを伺いながら，浅沼さんの逝去が京都大学および経済学部にとってだけではなく，経済学・経営学界にとっても，大きな損失であることを改めて，かみしめております。

先の経歴の紹介にありましたように，浅沼さんは1961年に学部を卒業されましたが，わたくしはその前年に卒業し，大学院もいっしょでした。わたくしは大学院を出てしばらく甲南大学につとめた後，1969年から再び，しかし今度は学部のスタッフとして浅沼さんと仕事を共にするようになりました。わたくし達は相互にその研究領域をよく理解していたので，競争もしまた協力もしました。学部長の職もわたくしの後を浅沼さんが襲い，浅沼さんが経済学部長の時はわたくしが学生部長をつとめるという具合に，いわゆる管理職としても，時間的・空間的に密接に連結した領域で，意見の交換をくりかえしながら共に仕事をしてきました。ほぼ35年にわたるかけがえのない親友であり，相談相手でありました。そういう者としてわたくしは，浅沼さんのお人柄についていくらかお話しを申し上げ，彼を偲ぶ追悼の言葉に替えさせていただきたいと存じます。

今日この葬儀にお集まり下さった皆様の中で，どなたもが御同意下さる浅沼さんの特徴といえば，あの丁寧な話し方でありましょう。話しの内容は十分事前に熟考された上で，それでも話すときはそれを確かめるようにゆっくりとなさる。学部学生として浅沼さんと最初にお会いしたときにわたくしが受け取った印象が，この話し方でありました。その後すぐに彼はわたくしより年長であることを知り，語り口もそのせいかと考えていた頃もありましたが，35年を経過して，これは浅沼さんと切っても切れない，浅沼さんの文化であると確信しています。この丁寧な話し方は，対話の相手に丁寧に耳を傾けるという誠実さと表裏をなしています。彼が相手の話しを性急に遮るという状況をわたくしは一度も経験しておりません。私的な対話であれ，研究会の討論の場であれ，あるいは紛糾する会議の場であれ，この誠実な姿勢は少しも変わりませんでした。それだけで

はありません。浅沼さんは御子息たちにも，同じ姿勢で対話をしておられることをある機会に知り，他者に対するその誠実さに驚きました。わたくしが自分の息子や娘に対するときに，父としての，また年長者としての横暴さがあることを思い知らされ，内心恥ずかしく思ったほどです。

浅沼さんのこの丁寧な話し方は，およそ課題は解決しなければならないという強い責任感覚に関係があります。この解決にたいする強い関心およびそれに支えられた話しの展開の仕方は，その場に集まる者が友人である場合にも，また年長者が多くいる場合にも区別無く，見られることでした。たとえば浅沼さんは助教授でありながら，紛糾する問題を前に教授達よりもはるかに見通しの良い話しを展開される。そういうことがしばしばありましたが，これは課題の解決に必要な思考のシュミレーションを体現しているかのような，浅沼さんの文化によるものだと考えています。告別式の折に浅沼さんにたいするお母上の弔辞を伺いました。その中でお母上は，第2次大戦後大陸を引き揚げられるとき，少年の浅沼さんがお母上を助けて御家族無事に帰国されたことに言及され，浅沼さんにたいする感謝のお気持ちを切々と綴っておられました。わが身より早く子を先立たせる親としての御無念さに心を打たれながら，わたくしはふと「天性の統率者」という言葉に思い当たっていました。「天性の統治者あるいは政治家」と申しているのではありません。統治者，政治家あるいは思想家の場合，自分の理想や主張が容れられないとき，容れられなかった環境を批判したり，嘆いたりすることがままありますが，彼はそういう行動とは無縁の人でした。丁寧に話しをするという彼の文化は，浅沼さんが，批判や慨嘆することでは課題は解決しないことをわきまえた強靭な自我の持ち主であることを意味しています。学部長として浅沼さんは経済学部の改革に努力されたのですが，多様な意見がある中で，それを統率するのに，持続してその誠実な話法を守りました。その努力の成果をわたくし達は今ありがたく掌にしていますが，同時にそれは文字どおり浅沼さんの骨身を削ることにもなりました。

丁寧に話しをするという浅沼さんの文化あるいは浅沼さんが「天性の統率者」であるということにすでに含まれていますが，浅沼さんは一歩一歩理詰めに考える人でした。思いつきではなく，合理的に思考を進める人であったと申せましょう。わたくしは浅沼さんの持つ合理的な側面にも敬意を払いかつ啓発も受けて，おつきあいをしてきましたが，同時に余りにきちょうめんであるため当惑したことも，ほほえましいと思ったこともありました。いくつかの風景を申し上げます。助教授になってまもなく，浅沼さんは

醍醐寺の近くにある現在の住居に引っ越しをされました。わたくしは手伝いに出かけましたが，その折のことです。引っ越しの作業のなかで，持ち運びは力仕事ですから簡単ですが，やっかいなのは家具の配置です。その配置は運び入れる家具の順番とも連動しますから，理想的には配置を最初に決めるのが上手な手順でありましょう。いわばダイナミック・プログラミングの問題を解けば良いのです。ところで，いちばんいい配置がすぐに決まれば良いのですが，なかなかそうならない場合があります。雑然とはいえ持ち込んだ家具を見ながら，望ましい配置案が浮かぶということがあるからです。しかし合理的な推論を重視する浅沼さんは望ましい配置を頭の中で考え抜いてから，行動に移るというやりかたでした。配置の如何は手伝いのわたくしが口を出すべきことではありませんので，浅沼さんが思考を続ける間，わたくしは待たねばなりませんでした。わたくしの言うとおりにすれば，もっと早くすむのにと思いながら，であります。このときは当惑しました。当惑しながら同時に声を出して笑ったこともあります。大学院重点化のことで浅沼さんは部長として文部省によく折衝に出かけねばなりませんでした。そういうときのことです。大学院重点化という最終目標は決まっており，そこに到達する各段階の作業も分かっていました。先のたとえでいえばプログラミングの解は分かっていました。問題はその解に当たる作業が完全には進まず，次の段階に移れないということでした。その作業が未完成であっても見通しがあれば，次の段階の折衝が可能である，とわたくしはくりかえし申しましたが，順序を重んじる浅沼さんはなかなか動こうとしません。各段階の作業には当然タイム・リミットがあります。浅沼さんが上京しようとしたのはそのギリギリの時点であり，折衝のアポイントメントをとれるような環境ではありませんでした。この状況をどうきりぬけるか。彼のとった方法は，文部省の一日の仕事がはじまる前に，早朝から大学課の入り口に立ち，担当官の到着を待つことでした。あまりにも奇抜な行動であったので，わたくしは不謹慎とは知りながら笑いだしましたが，そのわたくしに彼は，そうするのがいちばん合理的で，担当官のスケジュールにかかわらず，担当官と話しができるのだと真面目な顔で説明されるのです。

わたくしの記憶では経済学部のスタッフの中でアタッシュ・ケースを使ったのは浅沼さんをもって嚆矢とします。これも合理主義と関係があります。A4サイズの大きさのペーパーを，2列にしかも形を崩さずに運べるのはこれしかない，というのが彼の理由であり，わたくしもそれには掛け値なしに賛成して，わたくし自身もすぐに使うようになりました。もっとも当時はショルダー・バッグが全盛であり，「合理的でない」他学

部の先生方からはさすが経済学部だ，ビジネスマンみたいだとやわらかい顰蹙を買いました。浅沼さんは合理的であればこのように，一見ビジネスマンの格好になりましたが，また雪で凍てつく日にはデイパックを背負い，あるいは両肩からたすき掛けにバッグを掛けて歩く姿にもなりました。わたくしにはその姿が背嚢を背に，水筒と銃をたすきに掛けて雪原を行進してくる兵士のように見えて，彼にそう言いますと，両手を手ぶらにして歩けば，滑ったときに安全だ。そのときもまっすぐに合理的な返事が帰ってきました。

彼は日常にいうところのつきあって楽しいという類型の人ではないと思います。しかしこのようにその透徹した合理主義故に，わたくしには，畏友であると同時に「愛すべき友人」でもあり，心が和みました。

最後の病床になった大学病院から電話をいただいたときに，わたくしが心の中で彼に誓ったことは，天国におられる浅沼さんにはお見通しでしょうから，申しません。しかし2年前に浅沼さんに依頼され，果たしていない小さい約束のことで，寛容な浅沼さんはもう忘れておられるかもしれませんが，おわびを申さねばなりません。そのとき浅沼さんはもし手許に残っていたら，カマロの写真が欲しい，といわれました。カマロは浅沼さんが1974年から2年間ハーヴァード大学エンチン研究所に客員研究員として留学された折に使い，その後わたくしがテーク・オーヴァーすることになった，68年型式のシボレーのスポーツカーです。カマロに乗っていたことをお嬢さんが信じてくれないからと浅沼さんは苦笑しておられましたが，同じ願いを昨年の夏大手術の後の病床でも聞きました。退院されるまでには探して置くと申しながら，浅沼さんが退院されても果たさずに放置しておりました。春なお浅い告別式の日，午後の陽射しに輝くシボレーの霊柩車に乗り天国に旅立つ浅沼さんを見送りながら，わたくしはふと，一枚のカマロの写真が浅沼さんにそして御家族にとって持つ意味に気づき，暗然としました。この2年は，心血を注がれた部長職の後半の1年と報われなかった闘病の1年よりなりますが，この苦境にも統率者としてのつとめを果たそうとされた父・浅沼さん，そして彼同様に心優しくこの苦境を担い合われた奥様と御子息たちの姿がほうふつと現前したからであります。このようにすばらしい御家族でありました。そしてその約束を果たさなかったわたくしには，浅沼さんから受けた御厚誼に何の返礼もできなかったような寂しさが残っています。

浅沼　萬里というかけがえのない友人をわたくし達から奪うという苛酷な試練を，神

はなぜなさるのか。これは告別式を司祭された牧師のおことばです。それにつづき司祭は，神の前に安らかに救われてある浅沼さんのことを，そしてその意義を申されました。その折わたくしは苦痛から開放された浅沼さんの喜びを思い，安らかな寝顔をひたむきに想像しました。浅沼さんとの35年にわたる交友を振り返る余裕ができたいま，わたくしの目に浮かぶのは彼の寝顔ではありません。あの激痛から永久に解かれ，研究課題であった企業間関係の問題を研究する姿です。そう考えることで，浅沼さんの無念さを，そしてわたくしの悔しさを慰めてもいます。

最後にもう一つわたくしの個人的な感情を申し上げることをお許し下さい。浅沼さん，ありがとう。安らかに研究をお続け下さい。